



学園はなの村？

はなの村だより編集長

松井道夫

はなの村開園当時を振り返ってみよう。故宮城さんが、周りの農園が荒れて来だし、ふと気づいたら、秋だというのに虫の声がしない……、これは何なのかと調べだし、その問題を報徳社の常会で発表した。反応が鈍い。そのころ、宮城さんはほかの用件でわが印刷屋を訪ねてきた。第一印象は「いやにまぶしい人だな……と」話をしていてもいつも普通の人と話すときと様子が違う。そのうちに、宮城さんは次々と問題点をあぶり出した文章を持ち込んできた。当時、80歳手前、私の父と同じ年だったからよく覚えている。

「宮城さん、早く手をつけないと手遅れになってしまうよ。構想もいいけど、いい加減のところを手を出さないと間に合わなくなる……」と無礼

学園花の村機関紙第96号

2017年4月3日(月)

編集兼発行人 松井道夫

TEL (0537) 24-0101

FAX 24-0242

〒436-0079

掛川市掛川三1065

にも助言させていただいた。すると「なら、あなたも一緒に参加してくださいよ」と誘われた。そして、「掛川市の中で農地一〇町歩くらい借りられるところを知っていたら教えてくださいよ」と来た。友達に農業のプロがいたので、彼に知恵を借りた。そして、ここ光陽の地を知った。それから、伊豆半島の下田で、新村研という宮城さんの構想を支援する人たちとの話が始まった。

そのときに気がついた。誰も農作業をしたことがあるものは皆無であることに……、観客ばかりでプレイヤーがいらない球技場……、私は覚悟を決めた。私も耕作者にならざると得ない。

宮城さんのすごいところは、誰もが寄ってくることに、来る者拒まず、で鳥取大学の名誉教授であった津野先生をブレインに組み込み、掛川の大日本報徳社で「学園はなの村」の設立総会が行われたのが、平成10年5月24日である。

なんとか、かんとか20年になろうとしている。創立メンバーも年を重ね、衰えも目立つ。世代交代の声も聞こえてくる。当初、一区画、一反としたのには訳がある。殺虫剤不使用、無農薬、有

機栽培で行うのなら、土地の使い回しをしなければ、輪作障害に耐えられない。区画が日本一広い市民農園になったのは、無理をしなさいという意味ではない。上手な土地の使い回しを進めているのだ。陰で雑草だらけの、といわれているのを聞いてもいるが、あくせく耕すことをせず、のんびり自然とともに作物の生長に付き合うためである。そのため、鳥が虫が逃げてくる。それがためにイノシシや鹿という歓迎せざるものさえ現れ、頭痛の種になっている。以前、東京の三水会で村尾さん(愛媛大学客員教授)から、ドイツの農園事情の話を知った時には、イノシシなどは被害をもたらさない、という信じられない話を聞いたのだが、彼等の農園事情の違いを認識しても、そうおおらかに獣害を見過ごす訳にもいかなっていない。

創立当時と比べて、全体に豊かになってきた。しかし、農地の利用状況に好転は見られていない。後継者不足はより深刻になってきているが、その声は大きくはなっていない。玄米を食べることで体の健康を維持できていることのメリットを享受しつつ、(無農薬の玄米食の健康への貢献度は非常に大きい)仲間作りに精を出したい。

設立の過程については「みんなでやろう小さい農業」に詳しい。その動画はインターネットで視聴可能である。

猫の尻尾のようなネコヤナギの花

小 関 栄

わが家の池のほとりにネコヤナギの木がある。早春、枯れたような木の枝先にたくさんの蕾が出て、次第に膨らみ、それが銀鼠色の楕円形の穂になる(右の写真)。ネコヤナギの花だ。艶やかな猫の尻尾に似た毛並みなので、愛称として名付けられた。本来これはカワヤナギ(川柳)だ。この木は雌雄異株で花を付けるのはオス株で、メス株は花が咲かない。



ヤナギは中国では楊柳ようりゅうと称して多くの詩歌に親しまれている。ヤナギの名称は漢名の楊ようの音が(yang→yangi)変化したものと云われる。

ヤナギは種類が300余種と云われる。一般にはシダレヤナギが多いが、その形状からヤマネコヤナギ、オオキツネヤナギ、イヌコリヤナギ、ウンリュウヤナギなどと、動物の名前が付けられているのが面白い。カワヤナギは川辺に多い所から昔から通常に云われていた。

ネコヤナギ 水辺に揺れて 春招く 淡水

里山倶楽部(溝口博之会長)グリーンバンクの里桜、ドウダンツツジを植樹

29年3月里山倶楽部では掛川市グリーンバンクから里桜20本、ドウダンツツジ20本の提供を受け、「倉馬の里」に植樹をしました。里桜は接木をした立派な苗でその添え木用として倉真の奥の竹林から青竹を切り出し桜1本に添え木3本、計60本を準備しました。その作業は地主の松浦さんと新美さん・藤本が担当しました。

植樹は里山倶楽部の会員が3回に分け実施、延30人が参加、あらかじめ耕運した場所に50センチ程の穴を掘り支給された炭や牛糞・稲わらを交ぜました。

「元気なうちに桜が見れるかな」と言いながら終わりました。

ドウダンツツジは花壇の両脇に植えました。この花壇は日頃から細谷佳宏さんのファミリー(ご主人・奥さん・お嬢さん)が手入れをされており、冬場はパンジー、これからはチューリップ・グラジオラスなどが咲き始め、訪れる市民の目を楽しませてくれます。

誌上をお借りして細谷ファミリーに感謝申し上げます。

また果樹園を含む「倉馬の里」の手入れをいただいている里山倶楽部の方々にも御礼申し上げます。

(藤本記)

里山倶楽部

味噌造りへ

2月25日、アトリエとでもにて、大高酵素の社員を招き、味噌造りのための酵母の話聞いた。昨年収穫した大豆をおいしい味噌にするための予備知識として、里山クラブ会員の熱い思いがひしと伝わってきた。

3月18日、倉馬の里、集会室にて味噌造りを行った。清水さん、池上さんからの事前アドバイスをメールで受け、当日8名の会員が味噌作りを行った。



会員たちは、秋においしい倉真産の味噌ができることを願い、大豆と麹のちょうどいい合体に力を込めた、昨年はカモシカにやられてしまったが、今年はそのようなことのないように。



そばを蒔く

3月24日、昨年まいたそば畑に今年もそばを蒔いた。昨年、繰り返し植えたために、作業ははかどり、9時に蒔き始め、一時間足らずで完了。余る勢いで、昨年大豆を蒔いた光陽の里の畑にもそばを蒔くことにした。その作業もあつという間に完了、後は、「アトリエとでも」にて4月の行事計画を立てた。

今年は春が遅いようで4月2日の花見は遅れる予想。

ワラビ出荷始まる

3月22日、午後、ワラビ採りを行った。今年は少しワラビの出が遅れているようで、芽はちらほらと見かけた程度だった。池上さんの小屋で包装し、灰を詰めて出荷体制を整え、23日朝、出荷した。これから、様子を見ながら道の駅への出荷が

続く。

ツリーハウス

ツリーハウスづくりが始動した。28日、午前中とりあえずは基礎工事からと、溝口会長以下、オダックイ(静岡方言)が駆けつけた。

次回は、4月1日、里山倶楽部、会員さん出番ですよ。



予想に反して木は切らず、ハウスを丸ごと包み込む?

(松井 記)

光陽の里始動

会員64名で始動

コンピューターがウイルス被害に遭い、2月～3月中旬まで全く使用不能となり、修復作業に追われている毎日、ようやく光陽の里会員名簿が新しく出来、光陽の里会員64名で始動した。

有機栽培、殺虫剤不使用と窮屈なルールで会員を縛り付けている光陽の里であるが、そのためにこの里には虫が逃げてくる。鳥も、さらにはイノシシやハクビシンなどの歓迎されざる害獣も押し寄せるようになって痛し、痒しである。

安心・安全を求めお母さん方には心強い味方であると自認しているが、その農法は千差万別であり、紹介するにも苦労するが、とりあえず私が承知しているのは、

1に「EM菌」(今は、多種多様の発酵菌)

2にひたすら耕す、草をこまめに取り続ける

3に不耕起・自然に任せる(福岡

式?)

4に有機質肥料を投入あたりであろうか。

害獣に関しては、畑の相性があるのだろうか、私の里芋などは隣の里芋畑に比べて育ちが遅く、心配していたが、そこにイノシシが来た。最初はミミズでも掘りに来たのか、土の表面を少し荒らした程度で、芋に被害がなかったので安心していたら、いつの間にか、根こそぎやられてしまった。隣の立派な里芋畑は、電柵もしてなかったのに、無害だという。

今年の春はおそいようで、3月27日になっても肌寒い。4月の桜の花見予想でも遅れるという予想、天候不順が我々農業者には一番の気がかりである。今年のジャガイモ、里芋・なす・トマト・かぼちゃ・オクラ・ニラ・ピーマン・グリーンピース・ネギ・タマネギ……順調に育つように、まずは土の手入れから

柴さん、いよいよ掛川へ

「倉馬の里」の里親であった柴圭子さんは本拠地を京都から、掛川市原谷に転居し活動の舞台を掛川に移すことになりました。最寄駅は天竜・浜名湖線の原谷駅です。隣の住人は里山倶楽部、会長の溝口さんのお嬢さんの嫁ぎ先、というのも何の縁なのか、花の村も賑やかになります。



早速28日、関西学院大学の女子大生2人と専修大学の留学生の「タロちゃん」を倉馬の里・光陽の里に

案内しました。倉馬の里では、ま

さに工事中のツリーハウスに興味津々、「いつできあがるの」「出来あがってからもう一度……」柴さんの行動力を彼らはいかに感じたことでしょうか。少なくとも退屈な田舎暮らしとは思わず、わくわく都会になり自然あふれる魅力にどっぷりつかった柴さんの若さに恐れ入ったことでしょうか。

次に光陽の里を案内し、「アトリエとでも」で一服。

柴さんが原谷に帰って行きました。夜にどんな楽しい語らいがあったことでしょうか。(松井 記)

3. 28年度会計報告(28/1~28/12)

(単位 円)

収入		支出	
会費収入	52,000	集会室固定資産税	23,300
会費(団体)	10,000	集会室地代	30,000
会費(個人)	42,000	全報連会費	20,000
推譲	225,000	同窓会出席費用	7,650
(会報)	120,000	花の村便り発行費	120,000
(その他)	105,000	総会費・出版記念会	6,300
		布マルチテキスト購入費	52,212
		綿幸媛通信ファイル購入	5,432
会議室使用料	26,700	布マルチ米宣伝用購入	6,000
預金利息収入	45	取材費	9,180
		電気代	3,600
		雑費	1,640
		送金料	1,296
		剰余	17,135
計	303,745	計	303,745

2016年12月	498,697
2015年12月	519,146
差し引き	- 20,449
立替金	37,584
再差し引き	17,135
出版勘定貸付	84,000

4. 29年度資金計画(29/1~29/12)

(単位 円)

収入		支出	
会費収入	52,000	集会室固定資産税	23,000
会費(団体)	10,000	集会室地代	30,000
会費(会員)	42,000	花の村便り発行費用	120,000
推譲	195,000	全報連会費	20,000
広告収入ほか	10,000	総会費(弁当代)	5,000
		布マルチ普及推進費	50,000
		電気代	3,600
		剰余	5,100
計	257,000	計	257,200

平成29年度学園花の村総会(3月23日)

1. 28年度実績(28/1~28/12)

(1) 里山倶楽部の多彩で積極的な活動

- ・春先からわらび刈り、とりわけ地元倉真の児童保育施設「パンダひろば」と連携したわらび刈りは好評でした。
 - ・春そば・秋そばの2シーズンに渡って、そばの植え付けから収穫・そば打ち・試食と手作りの味を堪能しました。
 - ・春先椎茸原木を切り倒し、菌打ちをして年末には収穫することが出来ました。
 - ・花壇・果樹園の手入れを定期的に行いました。活動後にBBQ・芋汁など会費制で飲食を楽しんでいます。
 - ・正月は川根温泉で新年会春は倉馬の里で花見を楽しみました。
 - ・台湾大学の学生が会員宅へ宿泊し、農業見学を会員は観光旅行で相互交流を図りました。
- 里山倶楽部のモットーは楽しみながら農業を勤しむことです。

(2) マルチ稲作の普及活動

水稲布マルチ直販有機栽培を初馬地区で普及に注力、初馬地区は圃場整備が進み、暗渠もあり、コック一つで水の出し入れが可能で布マルチに最適な田が多くある。29年2月18日、津野先生を招請し布マルチ稲作研究会を開催しました。20名を超える参加者がありました。

(3) 花の村便りの定期発行

広報誌である花の村だよりを2ヶ月に1回、年6回定期的に発行し「花の村」活動のPRに努めました。

2. 29年度事業計画

(1) 里山クラブ活動の支援

(2) 食の安全に関心を寄せる女性グループとの連携強化

(3) 布マルチ稲作への地元農家への働きかけ

百歳の「農業青年」相羽春一さん



学園はなの村会員の農業実地指導にご活躍の相羽春一さんが3月9日、百歳を迎えられました。最近でこそ長寿社会の到来で百歳は珍しくありませんが、相羽さんの百歳はひと味違う、今でも自力で田んぼ4反5畝、畑1反をこなす自称農業青年です。百歳人生は相羽さんの日常にお聞きするにしかずと、1月11日、昨年の白寿ルポに続き、今年も農業ことはじめの「たんぶちこう」をすませた相羽さんを、事務局長藤本さんとお尋ねしました。「農業青年相羽春一さんの近況報告」です。

最新技術のお出迎え

相羽さん宅の20畳ほどの広い部屋に通されて驚いた、縁側の片隅になんとスポーツジムで見るランニングマシンが置いてあるではないか。相羽さんは「昨年暮れからやっていますよ」とジョギングをやっている。「スピードを合わせるのがちょっとむづかしい」とか言いなが

らせつせと脚を動かす。これが百歳の人のやることか。度肝を抜かれた。足は達者で、体に痛いところは一つもない。毎朝5時に目覚めると体全体を一通りさすってから起きることにしている。それから柔軟体操。それが済んだら仏前で般若心経の読経だ。(一昨年末奥様さわさんご逝去)。「今ではすっかりお経の文句を暗記してしまっただ」と、私達によどみなきお経を聴かせてくれた。

最新技術のモダンな生活

「部屋の掃除が行き届いておりますね。これは近衛兵時代の訓練の賜物ですか」と問えばさにあらず。いたずらっぽく笑って「ロボット掃除機に任せている」。そういえば先ほど来、部屋の隅まであちこち行き来していたあれの事かと合点がいった。障害物に対応して自動制御機能を働かせるこの掃除機が大のお気に入りなのだ。

「先ほどのランニングマシンといい、相羽さんの生活は実にモダンですね」と感心すれば、まだまだと片耳に手をやって補聴器を取りだした。相羽さんも人並みに五体の機能の衰えがある。耳がとおい。思い切って高価な製品を使うことにした。人生これからだ。「お金を目の前に積んでも何も聞こえはしない。88歳になったとき、米寿記念に買ったコンバインで稲刈り

をして、車上で快哉を叫んだ進取の気性は今も健在だ。

百歳農業のエネルギー

「野菜満載味噌汁」

昨年育てた野菜は15種類、これがみな味噌汁の具となって朝と昼の食卓を賑わす。何から何まで自前の新鮮な野菜満載の味噌汁だ。これが今の相羽さんの百歳農業を支えるエネルギーになっているに違いない。ごった煮味噌汁を作るのは息子さん敏雄さんの担当。親子で健康食生活だ。

百歳の農業青年の悩みは免許証

今困っていることはという私の問いに、やや考えて、「百歳になったら自動車免許証を返すことにしているのだが、そうなったら畑に農機具を持っていかれなくなる。さてどうするかだ。」素晴らしいながら倉庫から取り出してきたのはセニーカー。(ルポ先頭の写真参照)「これで農機具をどう運ぶか、機械の改造を模索中」という。近衛兵だった時代、馬の習性を見抜き、号令一声で、馬を寝かせた相羽さんだ。(表彰状が欄間に飾ってあった)。きっと人をびっくりさせる発明をするだろう。常に明日を目指す相羽さんの人生に拍手を送ります。

(広報担当 伊藤公博)